

「理想郷」としての日本庭園の意匠と技術

本中 眞

(文化庁記念物課主任文化財調査官)

1. 序—日本庭園の源流—

日本人は、古来、自然界の森羅万象に幾多の精霊が宿るとする自然神崇拝の精神を基調としてきた。例えば、山、島、森、樹木、池沼などを精霊の宿る神性豊かな聖域と見なし、川や海なども遙か彼方の楽土(理想郷)や聖域へと通ずる道であると意識してきた(図-1,2)。山の斜面に露出した巨大な岩塊や樹齢を経た大きな老古木なども、神が天から降臨する場所として神聖視してきた(図-3)。これらの自然の地形・地物は、すべて岩、水(湧水・流れ)、植物から成り、後代の日本庭園に用いられた素材と共通する。つまり、日本庭園には、もともと日本人が持っていた自然崇拝の精神が受け継がれているのであり、極めて高い精神性が込められてきたといつてよい。

2. 日本古来の自然崇拝思想と水辺の意匠

日本庭園の作庭思想の源泉は、仏教とともに大陸から伝わったとするのが通説である。しかし、それ以前の時代において、水辺に臨んで造られた神への祭祀場の考古学的遺跡には、後の日本庭園に共通する意匠・構造が見られる。

(1) 城之越遺跡(三重県伊賀市)

発掘調査で発見された城之越遺跡の蛇行溝は、仏教が大陸から日本に伝来する以前の4世紀後半から5世紀中頃に造られたものである(図-4)。石や木で組まれた3ヶ所の湧泉から、岸辺の緩やかな勾配の法面を礫敷で護岸した3本の蛇行溝が大溝へと連続

する。石敷蛇行溝が合流するY字形の部分では、溝の中へ岬状に突出するように造成された三角形のテラスの3隅に立石が施され、聖域の結界が表現されている(図-5)。今ひとつの合流点では、岬の突端に木と石を用いて水際に降りていくための階段状施設が設けられており、岸辺から水際へと及ぶ祭祀行為の動的な在り方を想定させる。

(2) 7～8世紀の庭園における流れの遺構

水辺に臨む禊の場は、大陸から庭園文化が移入される以前から、優れて造園的な水景意匠の対象として注目されてきたのであった。その系譜は、7世紀の古宮遺跡(奈良県明日香村)の小池とそれにつながるS字状石組溝(図-6)、8世紀の平城宮東院庭園(奈良県奈良市)の石組蛇行溝(図-7)及び平城京左京三条二坊宮跡庭園(奈良県奈良市)の曲池(図-8)へと受け継がれた。その過程で、水辺に臨んで行う禊という行為は、「曲水宴」という宴遊の要素を加味した詩情豊かな儀礼行為へと洗練されていった。

3. 古墳の周濠における水辺の意匠

3世紀～7世紀に多く造られた大王を含む有力豪族の墳墓の墳丘とその周濠の意匠・技術は、後代に日本庭園の水辺の意匠を成立させる上で極めて大きな役割を果たした。

(1) 巢山古墳(奈良県広陵町)

巢山古墳の鍵穴形の墳丘のくびれ部における発掘調査では、墳丘の一部が濠内へと方形状に張り出し、その汀線が緩やかな勾配の下に葺石で覆われ、四隅に立石が施されていることが判明した。この事例は、古墳の張出部が被葬者への墓前祭の場として神

聖視されていたことを暗に示すとともに、聖域と水景の意匠とが分かち難く結びついていることをも示している(図-9)。そこには、先に述べた城ノ越遺跡の蛇行溝に見る水景と同様の意匠・技術が見られる。さらに、石を用いて意匠された人工の丘と石敷きの水辺から成る古墳は、後代の庭園における築山と園池にもつながる性質を持っていたことが注目される。

(2) 前代の古墳の周濠を取り込んだ8世紀の貴族住宅の庭園

先に述べたように、平城宮東院庭園では礫敷きの州浜状汀線の意匠・技術が確立したが、その背景には、前代の墳墓である古墳の墳丘が、水・みどり・丘から成る造園的な空間として再認識されていく過程がある。平城京内に造営された貴族の邸宅跡における発掘調査によると、古墳の墳丘を敷地内に取り込み、葺石に景石を据えるとともに、礫を敷き足して水景の意匠を造り出すことが行われたことが明らかとなった(図-10)。墳墓の意匠には聖域を表現する技法と水景に関わる意匠とが緊密に関連しており、それが後代に造園活動の対象として積極的に取り込まれていく過程において、礫敷きの州浜状汀線の技法は確立したといつてよい。8世紀の日本庭園の意匠・技術は、中国・朝鮮半島から伝来した庭園文化の影響を受容しつつも、日本古来の水景に関する意匠・技術を母胎として、独自の発展を遂げたわけである。

4. 仏教と作庭思想の伝来

中国大陸から仏教が伝来した6世紀以降、それが定着した8世紀に至るまで、日本の庭園は特に古代の宮都が置かれた奈良を中心に造営された。その中には、仏教が伝来する以前の日本において、祭祀場における自然の水の流れを模した水景の意匠や、古墳の墳丘裾部の堀に臨んで景石と洲浜の工法を用いて造られた水景の意匠などとは異なり、石を積み上げて護岸した方形の池の意匠が見られる。仏教と

もに中国大陸及び朝鮮半島から日本にもたらされた作庭思想は確実に根付き、日本古来の祭祀空間に用いられた水景の意匠と混淆・融合していった。

(1) 石神遺跡の方形池(奈良県明日香村)

日本で最初の統一国家である大和政権が成立した奈良県の飛鳥地方では、発掘調査により多くの庭園遺構が発見された。その中には、石を垂直に積み上げて護岸した方形の池の意匠が見られる(図-11)。外国からの使者に対する迎賓施設の跡である石神遺跡(奈良県明日香村)では、建物に囲まれた中庭に一边約6mの正方形の石組の池が造られていたことが判明している。さらに、付近からは、「須弥山石」と呼ぶ石造の噴水施設(図-12)も発見されており、外国使節に対する水の饗宴が行われたことが想定できる。

(2) 古宮遺跡(奈良県明日香村)

推古天皇(554-628)の宮殿跡にも推定されている奈良県明日香村の古宮遺跡では、石で組まれた蛇行溝及び池、宮殿の正殿と考えられる建物の跡などの考古学的な遺跡が発見されている。石組の池と建物との間は約20m離れており、何らかの儀式を行う場として使用されたものと考えられる。石組の池は直径約2~3mで、池からは幅約20cmの蛇行溝が南の方向に向かって延びる(図-6)。池に溜められた水は溢れ、蛇行溝を伝って南へと流れたものと思われる。『続日本紀』などによると、三月初めに水辺に臨んで「曲水宴」と呼ばれる禊ぎの行事が行われていたことが判明している。したがって、古宮遺跡の石組の池と蛇行する石組の溝は、曲水宴などの儀礼・宴遊に使われた施設であった可能性もある。

(3) 平城宮東院庭園(奈良県奈良市)

1968~1980年の発掘調査によって、古代の宮殿跡である平城宮跡(1998年に「古都奈良の文化財」の構成資産の一つとして世界遺産一覧表に記載)の東端部に「東院」と呼ばれる区画があることが明らかとなり、その東南隅部に大規模な石組の園池が存在したことが判明した。

この庭園は、8紀の中頃に大きく改修されたことが判っている。8世紀前期の園池は逆L字形を基本形とし、汀線に近い池の底部に直径約30～40cmの玉石を帯状に敷き詰めている(図-13)。しかし、8世紀後期には全体を埋めて礫敷とし、複雑で優美な曲線を描く洲浜状の汀線へと変更している(図-14)。

9世紀以降に平安京(京都府京都市)に造営された園池のほとんどが、礫を敷き詰めた優美な汀線の意匠を持つことから(図-15)、曲線を描く汀線の意匠は8世紀の平城宮東院庭園において既に完成していたことがわかる。

5. 住宅庭園の意匠・技術の確立

(1) 儀式的庭(内裏の庭)

1968年の明治維新に伴って都がそれまでの江戸に移り、東京となるまで、およそ1,000年にわたって天皇の居所は京都の内裏にあった。現在でも、京都の内裏には天皇の居住空間であった紫宸殿や清涼殿などの木造建築が残され、その前面は白砂に覆われた「広庭」となっている。この「広庭」は、四季を通じて各種の儀式を行うために準備された空間であり、いわゆる自然の姿を象って造形した「庭園」ではない(図-16)。

(2) 寝殿造住宅の庭園の確立

上記のような白砂敷の「広庭」に付随して、儀式に際して楽人や舞人が乗る船を浮かべるために池が造られた。池を造るために掘った残土を盛り上げて中島や築山が造られ、自然の山野から掘り採ってきた草花が植えられた。中島には橋が架けられ、儀式に際して楽人の控所となるテントが設けられた。このように、様々な儀式に不可欠の住宅施設として、日本に固有の作庭の理念、意匠・技術を用いた庭園が造られ始めたのは9～10世紀のことである。

10世紀から12世紀の頃の貴族の邸宅を描いた絵巻物からは、当時の住宅と庭園の意匠・構造のみならず、それらが儀式に際してどのように使われたのか

について詳細に知ることができる(図-17)。「寝殿」と呼ぶ主人の居住建築を中央に、その南側に出し物を演ずる白砂敷の空閑地、舞人が乗る船を浮かべた大きな池、楽人の控所であるテントが設営された中島などがつぶさに描かれている。建築の内部のみならず、その前面の「広庭」や池などを含む庭園が、一体的に儀式の場として使われたことがわかる。このように、日本庭園は、野外における儀式の場であるとともに、水・岩・植物を素材として自然の姿を象った造形空間として完成した。

6. 「理想郷」としての「仏国土(浄土)」と日本庭園

11世紀以降、仏陀が入滅して一定の時期が経過すると、仏法の力が弱まり、世の中が乱れるとする「末法思想」が流行した。人々は現世における利益を求めるとともに、死後に西方浄土へと蘇生することを強く願うようになった。そして、仏が仏道に励む場所である「清浄化された仏国土」を現世に実現しようと試み、仏国土(浄土)を象った多くの寺院を造営した。

(1) 阿弥陀変相図に描かれた「宝池」と実際の浄土寺院の庭園

浄土寺院は、5～13世紀の中国莫高窟の壁画にも見られる阿弥陀浄土変相図や、中国の浄土教典に基づき源信(942-1017)が著した「往生要集」などをもとに、浄土の姿を三次元的な空間として現世に実体化したものである。阿弥陀浄土変相図に描く典型的な浄土の図像は、正殿と両脇殿から成る左右対称の宝楼殿舎群とその前面に「宝池」と呼ぶ水面の上に阿弥陀三尊仏が出現した形態を採る。多くの浄土変相図によると、浄土世界の重要な要素である「宝池」は宝楼殿舎群の基壇や舞台等により区切られ、その形態は矩形であるかのように描かれている。しかし、実際の浄土の姿を象って造営された寺院庭園の発掘調査によると、方形池等の矩形の園池が採用された痕跡はなく、すべて優美な曲線を描く洲浜状の汀線

を持つ園池が採用されたことが判明している(図-18)。

(2) 浄土寺院において背後の山が持つ意味

浄土思想が普及する過程において、浄土教の教理解釈の下に自然の山と人工的に造形された庭園とを視覚的に結合することが行われた。例えば、「山越阿弥陀図」と呼ばれる一連の図像(図-19)には、山と仏国土(浄土)との緊密な関係を読み取ることができる。これらの図像は、極楽浄土への往生を確実にするために臨終の人々の枕元に掲げるために製作されたものであった。それは、山の背後に上半身をのぞかせる阿弥陀仏の正面像を中心として、山の此方の中腹に飛来した観音・勢至の両菩薩像を両側に描き、臨終を目前にした観者にとって山中浄土、あるいは山の彼方の浄土を意識させるのに十分な緊迫感に満ちた構図となっている。このような美術作品において自然の山が仏国土(浄土)との関係の下に持った意味は、実際の浄土寺院の遺構において背後に控える自然の山が持った意味と基本的に共通するものである。仏堂の背後に位置する山は、山中を死後世界と捉える日本古来の信仰形態とも深く関わりつつ、仏国土(浄土)の方位を象徴する空間装置として重要な意味を持った。

7. 『作庭記』に見る日本庭園の 作庭思想と意匠・構造

仏国土(浄土)を表現した庭園には、仏教の儀礼に即した様々な置物が設置されたり、飾り付けが行われたりしたが、庭園自体の空間構成・意匠・構造は、11～12世紀の貴族の住宅に営まれた庭園のそれと基本的に類似していた。

「寝殿造」と呼ぶ貴族の住宅庭園の作庭理念は、11世紀後半に製作された『作庭記』に詳細に記述されて

いる。そこには、自然の姿を写し取り、岩・水・草木などの自然の風物に即した庭づくりの精神が示されている。このような精神・規範に基づき作庭された庭園で、今日に遺存する最も典型的かつ唯一無二の事例が平泉の毛越寺庭園である(図-120)。この庭園は薬師仏を本尊とする仏国土(薬師浄土)を荘厳して創造されたものである。しかし、海岸の砂浜を象った池の汀線、軽やかな溪流から緩やかに蛇行して静流する遣水、岩を組んで磯の姿を象った築山、大きな立石が据えられた岬などの姿には、『作庭記』に記された当時の住宅庭園の意匠・構造の規範が正確に反映されている。

8. 結論

以上のように、日本の古代庭園における意匠・構造は、自然神崇拜の思想に基づき水辺に臨んで行われていた祭祀とも密接に関係しつつ、6世紀に中国・朝鮮半島から仏教とともにもたらされた造園思想に基づく意匠・技術の影響を受けて発展した。日本古来の信仰形態と新たに伝来した仏教との融合の過程で、両者の反映の所産である水辺の意匠も相互に併存・混淆・融合を繰り返した。そして、前代の墳墓である古墳を園池として再利用する過程で、緩やかな州浜状汀線への回帰が主流となり、8世紀の平城宮東院庭園の園池における州浜敷汀線の完成を経て、9～10世紀以降の寝殿造住宅庭園にも通有の意匠・工法として発展した。さらに、11世紀から12世紀にかけて、末法思想が流行するのに伴って、仏国土(浄土)を表現した仏堂と庭園から成る浄土寺院が造営されるようになり、寝殿造住宅庭園において確立していた作庭の理念、意匠・技術を活かした日本独特の「浄土庭園」の様式が成立した。

参考文献

- 1) 本中 眞 (1994), 日本古代の庭園と景観、吉川弘文館
- 2) 本中 眞 (1998), 飛鳥・奈良時代以前の庭園関連遺構, ランドスケープ研究Vol. 61-3, pp 185-191
- 3) 本中 眞 (2006), 庭園, 信仰と世界観, pp 353-370, 岩波書店
- 4) Makoto Motonaka (2006), Japanese Historic Gardens - Their History and Contemporary Significance, PCP Forum, pp.65-75, Switzerland
- 5) 1992, 城ノ越遺跡－三重県上野市比土－, 三重県埋蔵文化財センター
- 6) 2005, 出島状遺構 巣山古墳調査概要, 奈良県広陵町教育委員会, 学生社
- 7) 1975, 平城宮発掘調査報告VI, 奈良国立文化財研究所学報第23冊, 奈良国立文化財研究所
- 8) 1990, 飛鳥・藤原宮跡発掘調査概報18, 奈良国立文化財研究所
- 9) 1976, 飛鳥・藤原宮発掘調査報告, 奈良国立文化財研究所学報第27冊, 奈良国立文化財研究所
- 10) 2003, 平城宮発掘調査報告XV－東院庭園地区の調査－, 創立50周年記念奈良文化財研究所学報第69冊, 奈良文化財研究所
- 11) 1987, 年中行事絵巻(日本の絵巻8), 中央公論社
- 12) 田村 剛 (1964), 作庭記, 相模書房



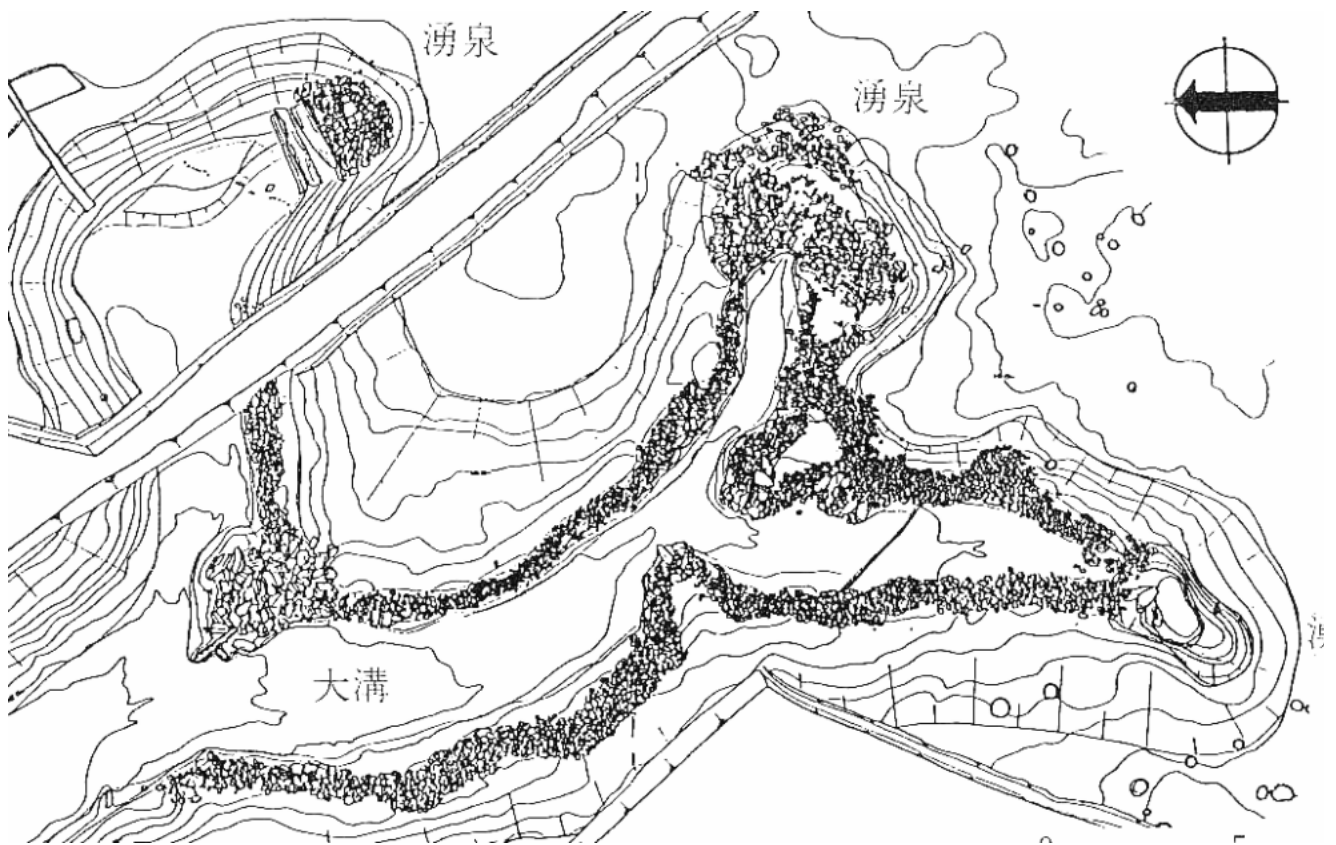
図一 1 沖ノ島[福岡県]
(福岡県教育委員会提供)
玄界灘に浮かび、古来、神が
降臨するとされた島。



図一 2 春日大社[奈良県]
(世界遺産「古都奈良の文化財」
の構成資産)
一の鳥居と背後に見える御蓋山。



図一 3 熊野速玉大社[和歌山県]
(世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」
の構成資産)
境内(神倉山)の斜面に位置する
ゴトビキ岩。



図－4 城ノ越遺跡〔三重県〕 大溝の平面図



図－5 城ノ越遺跡〔三重県〕 大溝に突き出た三角形のテラスと立石。



図－6 古宮遺跡〔奈良県〕（奈良文化財研究所提供） S字状の石組溝。



図－7 平城宮東院庭園〔奈良県〕（奈良文化財研究所提供）
石敷園池の汀線（手前）と並行して設けられた石組蛇行溝（後方）。



図－８ 平城京左京三条二坊宮跡庭園〔奈良県〕（奈良文化財研究所提供）
龍の形状に類似した曲池。



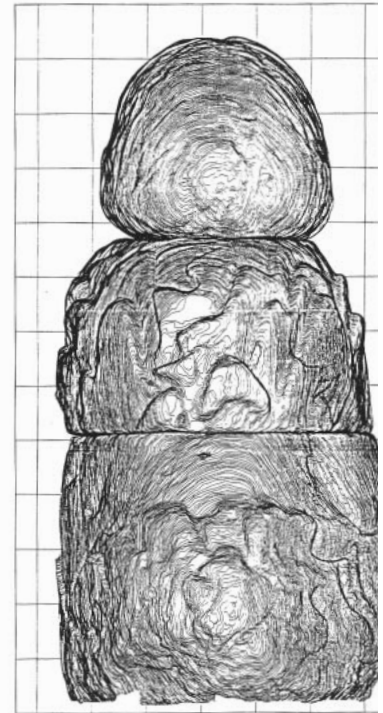
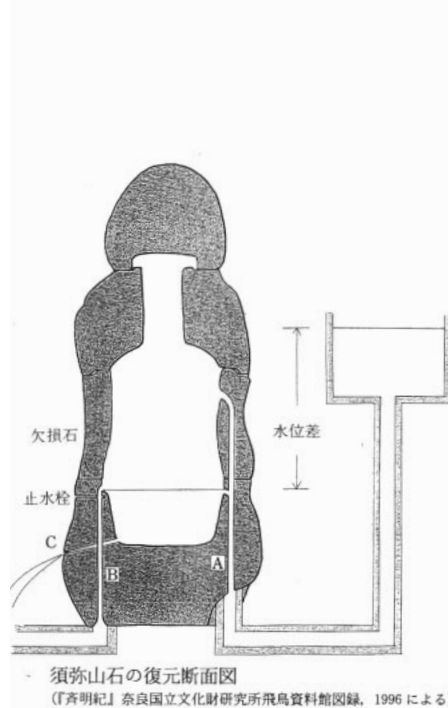
図－９ 巢山古墳〔奈良県〕（広陵町教育委員会提供）
造り出しの部分に設けられた立石と石敷き。



図－10 平城京左京一条三坊の貴族住宅の
庭園遺構〔奈良県〕
(奈良文化財研究所提供)
古墳の周濠を活かした園池。



図－11 石神遺跡〔奈良県〕
(奈良文化財研究所提供)
石組みの方形池。



図－12 須弥山石〔奈良県〕(奈良文化財研究所提供)
石神遺跡から出土し、仏教における須弥山を象った噴水施設であるとされる石造物。



図－13 平城宮東院庭園〔奈良県〕
(奈良文化財研究所提供)
8世紀前半の園池。



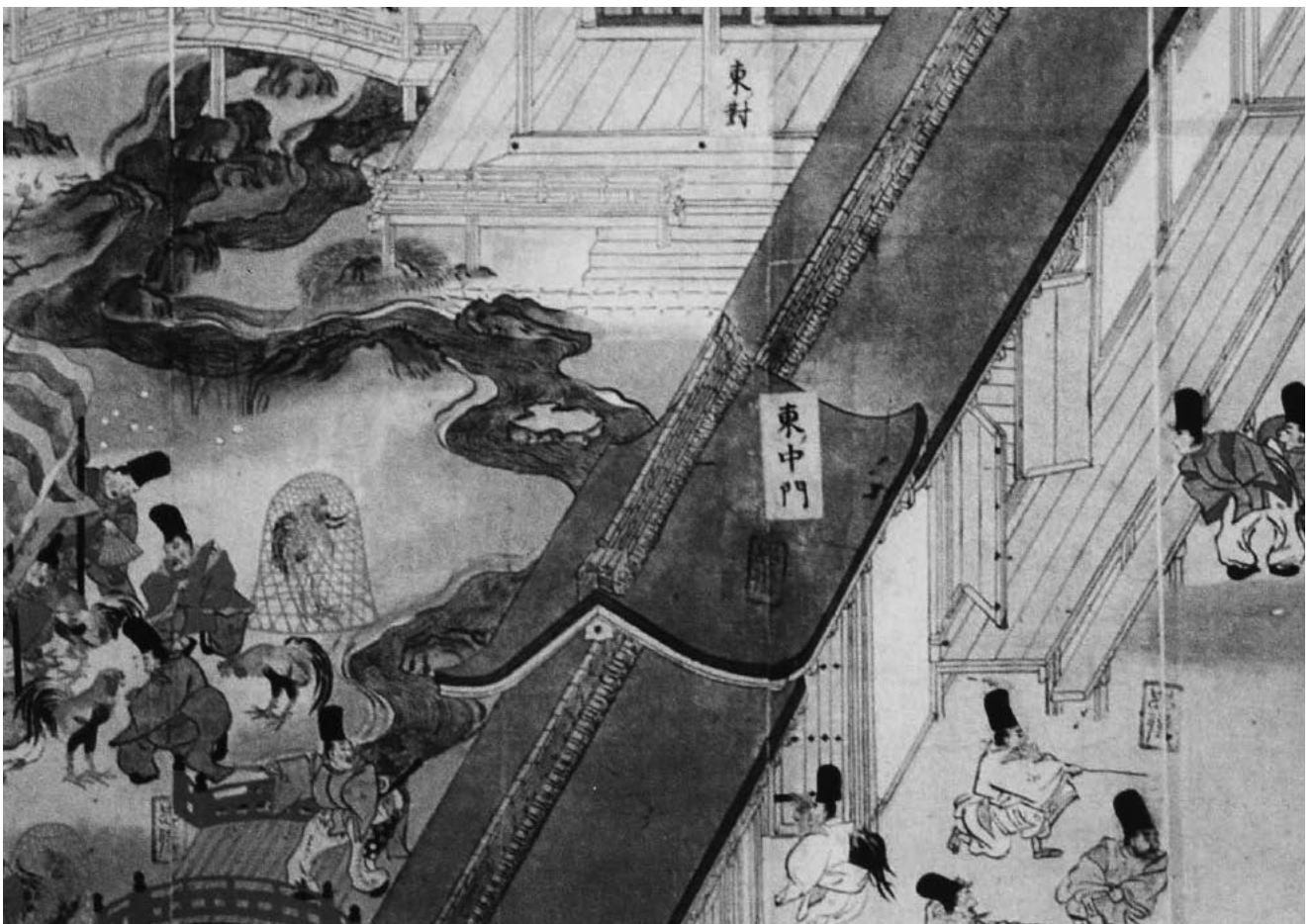
図－14 平城宮東院庭園〔奈良県〕
(奈良文化財研究所提供)
8世紀後半の園池。



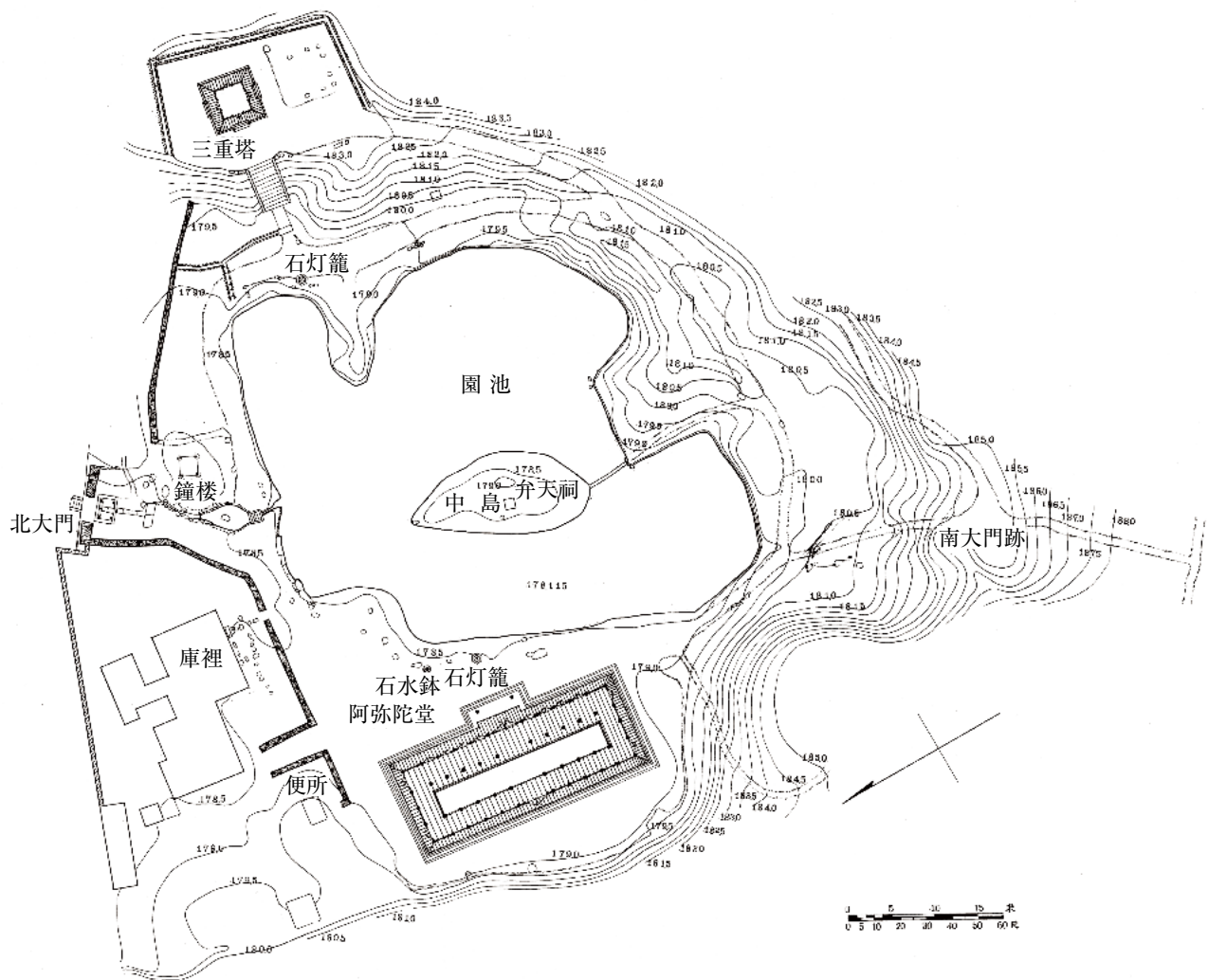
図－15 鳥羽殿の庭園〔京都府〕
園池の洲浜状汀線の遺構。



図－16 京都御所〔京都府〕（内田和伸氏提供） 紫宸殿前の広庭。



図－17 『年中行事絵巻』に描かれた貴族住宅の庭園（『日本の絵巻8』，中央公論社，1987）



図一 18 浄瑠璃寺庭園 [京都府]
平面図 (上) と園池東岸
からの阿弥陀堂の展望 (下)

